片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

岡嶌偉久子（おかじま・いくこ）
1985年、甲南女子大学大学院博士課程単位取得。天理大学附属天理図書館稀書目録室長。主要論文「源氏物語国冬本－その書誌的総論－」（『ビブリア』100号）「源氏物語伝二条為明筆本…その書誌的総論－」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「尾州家河内本源氏物語の書誌学的考察－鎌倉期本文の成立…」（『源氏物語の新研究－本文と表現を考える』新典社）

渡辺泰宏（わたなべ・やすひろ）
1955年生まれ。学習院大学大学院博士後期課程修了。聖隷クリストファー大学教授。主要著書『伊勢物語成立論』（風間書房）『平安文学研究 生成』（共著・笠間書院）『伊勢物語 虚構の成立〈伊勢物語 成立と享受1〉』（共著・竹林舎）

大口裕子（おおぐち・ひろこ）
1976年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。霞会館資料展示委員会学芸員。主要論文「伊勢物語絵百十九段と能〈松風〉－「形見こそ」の和歌を中心に－」（『美術史』160号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第四巻

2009年（平成21）10月31日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒 101-0064　東京都千代田区猿楽町 2-2-3
☎ 03-3295-1331(代)　FAX03-3294-0996
NDC 分類 913.32　　振替00110-1-56002

ISBN978-4-305-70044-5 C3395　　藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。　　（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

伊抄

称名院注釈

（三条西家旧蔵　学習院大学日本語日本文学科研究室蔵）

渡辺泰宏

・たへかたき心ちしける　女の歌の心、とにかくにたへかたく、くるしきと也。

〳〵とへはいふとはねはうらむ　前の歌、あやにくにして思の一かたになけれは、いかさまにせんと思ゆへに、かゝるおりにやせんかたなくて、人のしぬる事のあるらんといふ儀也。とへはとふとていふ、又とはねはとてうらむると也。

十四

十四　昔男みちのくにゝすゝろに　すゝろは心ならす也。卒字也。（私聞）

御書入〳〵すゝろとソゝロ同事歟。停車坐愛楓林暮ー。『文選』廿八、陸士衡、長歌行、体沢坐自捐ー。注、無故自捐曰坐也。

〳〵中々に恋にしなすは　桑子は、只一年にて死する物也。又ちきりのふかき物なるゆへに、かくいへり。恋といふ物はあひみる事をこそ憑（たのめ）む物なるに、さも侍らねは、せめて死なんと也。それも又、俄にはかなはぬなれは、中〳〵に恋にしなてあらは、桑子のことく契ふかくて短命ならんと也。玉の緒はかりとは、しはしの程にてもの事也。『古今』、

しぬる命いきもやすると心みに玉の緒はかりあはんといはなん

此心也。此歌、『万葉』十二に、

中々に人とあらすは桑子にもならまし物を玉の緒はかり

とあり。聊（いさゝか）ひきなをして用侍るとみえたり。

・うたさへそひなひたりける　ひなひは、ゐなかひたる也。

御書入〳〵『源氏』あつまやに、ひなひたるかみにてとあり。常陸守をいへり。『河海』に、ゐ中ひたるとあり。『枕草子』ニモアリ。

・いきてねにけり　業平の行たる也。

〳〵夜もあけはきつにはめなて　きつは狐也。下略也。はめは食也。くたかけ、鶏也。勘物にみえたり。鶏をかけとよめる歌、『万葉』にあまたあり。

庭（万七）つ鳥かけのたれをのみたれをのなかき心もおもほえぬかも

里中になくなるかけのよひたてゝいたくはなかぬしのひ妻かも

物おもふといねすおきたるあさけにはわひて鳴なりかけの鳥さへ

心は、夜ふかく鳴て思人をかへせは、狐に食はせんといへる也。せなは夫也。此段、皆狂言にかきなせり。

〳〵くりはらのあねはの松の人ならは　あねは、奥州の所の名也。『古今』（廿）、

おくろさきみつのこしまの人ならは都のつとにいさといはましを

と云を、いひかへたる許也。此女、都へもさそはるへき人にてあらんするには、さそひも行くへき物をと也。勝地は、ぬしなしとへり。松のことくならはと也。つとは裏也。都のみやけにつゝむ土産をいへり。それによせていへり。家つと、浜つとなともいへり。又の儀は、業平の心は、此女に心をはいれすして、只此松をうちなかめて興したる也。みつのこしまの人ならはといへることくによめるを、此女、我身を思ていへるにやと思て、よろこほひて思けりといひおりけると也。

・よろこほひて　東国の詞なるへし。よろこふ也。かくいへるは、男の思けるよと女の悦たる也。

十五

十五　昔みちのくにゝてなてふことなき　なてう事なきとは、無何（無見）条事也。なにほとの事もなきといふ事也。あしからすよからぬ人をいふ。此詞、『源氏』あつまやの巻にもあり、と云々。いかゝ。こゝの心は、人をかろしめぬ詞とみえたり。何条とは人を蔑如したる詞也。さもなき人とはよろしき人と也。

首書　きよけたちて、なてうことなき人のすさましきかほしたる、なをしきて、たちはきたるあり。ヒタチ（常）ノムコノ少将ヲイへり。

・あやしうさやうにては—　人の妻なれは、かく思へり。貞女とみえたり。

〳〵しのふ山しのひてかよふ　忍山は奥州にあり。さて、人の心のおくとそへたり。心の奥、しりかたき人なれは、心のうちへしのひてかよふ道もかなといふ心也。詞やさしく、心めつらしき歌と也。『古今』、